

# 名古屋市立神の倉幼稚園



創立：1977年  
住所：〒458-0812 名古屋市緑区神の倉四丁目210番地  
連絡先：TEL 052-876-6490 FAX 052-877-9869  
学級数：5 園児数：115人  
HP：http://www.kaminokura-k.nagoya-c.ed.jp



## 育てよう小さな命、探そう自然の不思議

### はじめに

本園は名古屋市の東部に位置し閑静な住宅街にある。最近では、自然豊かだった周辺環境も変化し、身近な自然に触れる機会が減りつつある。そこで、「育てよう小さな命、探そう自然の不思議」をプロジェクトテーマに、昨年度からESDの活動に取り組んでいる。

幼児は、身近な環境に好奇心や探究心をもって主体的

にかかわり、自分の生活や遊びに取り入れていくことを通して発達していく。子どもたちには、身近な自然に触れて遊ぶことでその美しさや不思議さに心を動かし、自然環境に心を寄せながら感性豊かに生活してほしいと願っている。今年度は、園内の環境を見直しつつ、地域の自然環境を体験活動に生かしながら実践を重ねている。

### 実践内容① 『「秘密の種」を育ててみよう』

ねらい：野菜の栽培体験を通して、気付きを伝え合いながら植物の生長を楽しみに世話をする

学年ごとに身近な場所で野菜作りをし、子どもたちが野菜の生長を感じたり興味・関心をもって世話をしたりできるようにしている。中でも5歳児は、1学期に夏野菜を種から育て、そのうち1種類は『秘密の種』として名前を知らせず育てた。生長の過程で、子どもたちは驚きや発見など様々な気付きを言葉や絵で表現していたので、教師も生長の様子を写真や絵で分かりやすく表示した。夏野菜の生長が友達との共通の話題になり、『秘密の種』の葉の匂いからトマトであることがクラスに広がり、大切に世話をすることができた。

2学期には、国際ESDセンターの先生方のアドバイスを受け、秋まき野菜の『生長カレンダー作り』に取り組んだ。当初は、秋まき種2種類に『不思議な種』『魔法の種』と

名付け、B紙に写真を貼ったり子どもが気付いたことを自由に書き入れたりする簡単なものだった。センターの先生方から、文字の書けない幼児でも気軽に表現できるように、教師がつぶやきを代筆したり、幼児が調べた内容を一緒に掲示したりするとよいことを教えていただき、幼児が参加しやすいよう工夫した。また、カレンダーの表示を下から上へ生長に合わせて書き加えていくようにすることで、生長の喜びを感じられるようにした。関心が薄かった子どもも、次第に、「大きくなったね」「何になるか楽しみ」と話したり、自分の絵を貼ることを喜んだりするようになった。また、収穫した野菜を汁物にして食した時、「シャキシャキしてる」「ざらざらした感じ」と、大根菜と小松菜の食感の違いに気付き、美味しそうに食べる姿も見られた。



みんなの発見が『生長カレンダー』になったよ

### 成果

何の種かあえて知らせず、子どもたちと命名して育てたことで、種まきから収穫まで関心をもって世話をすることができた。また、カレンダー作りでは、子どもたちが絵やコメント等で自由に表現し参加できるよう工夫したことで、小さな変化を伝え合い、気付きを深めることができた。

### 実践内容② 「熊野社で季節の移り変わりを感じよう」

ねらい：地域の自然に触れながら、自然への興味・関心を深めたり、不思議さを感じたりする

神の倉幼稚園の近くには、手付かずの自然がそのまま残っている「熊野社」がある。5歳児は年に5回、熊野社へ散歩に出掛け、季節の移り変わりや季節ごとの自然を、諸感覚を通して感じる直接体験を重ねている。

春：桜の下で花見をしながら弁当を食べたり、舞い散る花びらを追いかけてたりして桜の美しさを実感した。

秋：紅葉を見たり落ち葉やドングリ、木の実等を拾ったりして、秋の自然に親しんだ。環境カウンセラーを講師に

迎え、現地で諸感覚を十分に働かせ、季節の変化や様々な事象に気付いたりかかわったりすることができるような指導を受けた。

冬：春の訪れを探しながら、これまでの熊野社の様子を思い出したり、身近な自然も変化しながら1年を過ごしていることを知ったりして、身の回りの自然や生物の生命力を感じた。



落ち葉のにおい、土のにおいに似てるね

### 成果

1年間の取り組みを通して、身近な草花や木の実、虫などへの関心が深まり、友達と名前や生態を調べたり、ごっこ遊びや製作の材料に取り入れたりする姿が増えた。ワクワクとする感動体験が幼児の好奇心や探究心の育ちにつながった。

### 実践内容③ 「みるくちゃんのおもいで」

ねらい：生き物の飼育体験から、生きている物への親しみや愛着をもち、生命の大切さに気付く

4月の入園、進級当初は、環境の変化から不安になる幼児がいる。しかし、先生や友達と一緒に小動物に話しかけたり触ったりすることで、気持ちが和らぎ安定する姿がよく見られる。5歳児は担任と一緒にウサギの『みるくちゃん』の飼育当番をし、『みるくちゃん』も自分たちと同様に食事や排便をすることや清潔にすることの大切さに気付いて世話をしてきた。

10月、『みるくちゃん』が高齢から体調を崩し、翌月、永眠した。そのことをどのように子どもたちに伝えるか教

師間で話し合い、子どもたちが保護者とともにお別れができる場を設定した。生きているときのように動かない『みるくちゃん』を見て、元気なときの様子を思い出して話したり、寂しい気持ちを共感し合ったり、命の大切さを感じたりする姿が見られた。後日、A児は「みるくちゃんのおもいで」の絵本を作り園に持ってきた。



みるくちゃん、お見舞いきたよ。早くよくなってね!

### 成果

5歳児は、当番でウサギやインコの世話をするようになり、生き物への愛着や継続して世話をする大切さを感じるようになった。だからこそ、大好きなウサギの死はつらい経験だったが、生き物の命の大切さを改めて感じていたと思われる。

### おわりに

本園では、小動物や昆虫等を子どもたちと飼育したり、昆虫が好む植物を育てて自然環境を整えたりしている。また、季節ごとの身近な自然に親しむ活動を教育課程や指導計画に位置づけている。自然との心がわき立つような出会いを計画的に積み重ねていくことで、幼児の好奇心や探究心、“もっと知りたい”という意欲が育つよう実践を積み重ねている。

今後も、子どもたちが諸感覚を豊かに働かせ、身近な自然とのかかわりを深める体験活動を原体験として、生涯にわたり自然環境に心を寄せて生活していく子どもたちを育てていきたい。また、取り組みを保護者や地域にも発信し、ともに活動に取り組むことができるような基盤づくりにも努力していきたい。